

cocoromichi

cocoromichi

森下 一。精神科医である。
京口スコラ、生野学園、鎌倉てらこや。
そして、宮島てらこやへと
二十数年にわたって、不登校の子ども達や
引きこもりの子ども達を救うために
あるいは、社会のありよう
教育のありよう、地域のありように
警鈴を鳴らしつづけてきた。

人と出会い、仲間を作れる場は
やはり地域社会にしかない。

知識偏重の戦後教育には
子どもを大人へ成長させる力がない。
それに変わるものは、地域社会と
地域の心ある人のつながりではない。
と、森下先生は言う。
「宮島てらこや」は、そんな先生の志を
共有し、人と人をつなぎ
行動し続けて行きたいと思う。



大聖院・未来フォーラム

対談・4

ゲスト 森下 一氏

魂の再生には、 ものすごいエネルギーと 時間が必要なんです。

吉田 森下先生の指導を受けながら、宮島でらこやは一年を迎えることができました。改めてお礼申し上げます。

森下 いえいえ、私こそ宮島に呼んでいただき感謝しております。

吉田 とところで、先生は「てらこや」をなぜ始めようと思われたのですか。

森下 このままでは日本が危ないと感じたからなんです。国を支えるのは人々であって、自ら考え、自ら判断し、自ら行動できる人が、このままではいなくなる。高度成長時代からバブル期、バブル崩壊に向かった時代、人と人をつなぐものをバラバラにして人と物、人とお金の関係にしてみました。意図してないかもしれないけど、現実には、子どもさえ物にする教育となってしまうという中で、人と人を繋がない



ければと思ったんですね。

吉田 先生はそれ以前に、不登校の子ども達のための生野学園を設立されていますが、その体験もきっかけになったのでしょうか。

森下 不登校の子達や引きこもりの子などの魂の再生には、ものすごいエネルギーと時間が必要なんです。一方で手の届かないところにもっとたくさんのそんな子どもたちがいる現実。精神科医としては社会の問題

として予防を目指さなくてはいけないの思いがあったんですね。

吉田 原因は何で、予防するには何が大切なのでしょうか。

森下 不登校の子どもの特性に、人から良く思われたいという、外界からの評価の囚われと言うのがあります。逆に言う自分自身という自我が薄まっているんです。子どもだけでなく大人も、自我を形成させる本音を抑えて、他人から良く評価さ

対談・4

ゲスト 森下 一氏

体験できる場、 本音を言える場が 必要だと思っんです。

れるように振舞う傾向が日本全体に
広がり、自立できないままです
ね。



もうひとつは、体験の世界。人との
出会いや自然とのふれあい、物事に
熱中することが非常に少なくなっ
ている。だから、そんな体験できる場、本
音を言える場が必要だと思っんです。

吉田 宮島でも、昔、子ども達は遠
泳に挑戦していましたが、危険とい
う理由でいつしか中止になりました
た。そんな風に体験する場がどんど

ん減ってきています。

森下 背景には、地域の共同体意識
の崩壊や高度経済成長に伴う偏差値
で人を評価する社会の風潮。子ども
達にとって一番大きな問題は、小学



生くらいになって親からはなれて自
立へ向かう年齢になると、子どもの世
界で成長していくものですが、地域の
リーダーであるべき年齢の子どもが
受験競争に奪われ、子どもの世界その
ものが崩壊してしまっただけです。

吉田 結局、いい大学、いい就職が
目的になって、人として成長に必要
なものを全部我慢させてしまっ
てい
るんです。

森下 人が育つにはモデルが必要
なんです。子ども達は好奇心が旺盛
です。自然だけでなく人に対しても
うで、いいなと思うと「あのお兄
ちゃん」「あのお姉ちゃん」につい
て

まわって、いろんなことを学んで
すね。「学ぶ＝真似ぶ」と言うこと
ですが、それができにくい時代にな
ってしまっただけです。

吉田 弘法大師空海は、考えるだけ
でなく実践することが必要と強く言
われた方で、実際、教育に非常に力
を注がれた。お大師さんは、自らモ
デルであられたのです。 「宮島で
らこや」も学生や大人が良いモデル
でありたいと…。

森下 今の学校教育の延長と家族だ
けでは子ども達の成長が保障されな
いとすると、一体それはどこで可能
か。心ある人のいる地域の中で体験
し、人と出会い、仲間を作れる場は
やはり地域社会にしかないと思っ
て、やがて「鎌倉でそんな方々と出
会
えて、やがて「鎌倉でらこや」に
展
示していくんです。

慈愛があるから しつけも礼儀作法も 可能なわけです。



吉田 私は住職になったころ、社会や子ども達の環境に危機感を感じて、体験できる場「小坊主の会」を始めたのですが、子どもから学生、大人の世代がつながり、そこで子どもが変わることで親も変わる「鎌倉てらこや」を知り、そんなすばらしい場が宮島にもあったらいいなと思ったんですね。

森下 それぞれの地域にはそれぞれの個性があつて、地域の宝もあります。宝物のような学生さんもいるんですが、動かないと出会えないですね。

吉田 教える立場の人には「慈愛」が必要とも先生はおっしゃっていますね。

森下 慈愛の慈は慈悲の慈です。他者に安心とか信頼とか感謝とか、いい意味の感動を与えること。愛はいとおしむ、思いやることで、完璧でなくても、そうあろうとする心が必要なんです。子ども達は直感で持っているかいないかが判ると思うんです。江戸時代の教育「寺子屋」の中心には慈愛があつて、そこに大きな価値があつた。慈愛があるからしつけも礼儀作法も可能なわけです。知識はその後でいいんです。鎌倉の学生も全てが慈愛を持つているわけではないのですが、一方で学生を見る大人が厳しくも慈愛の心を持って見守っているから、学生もてらこやの活動の中で変わっていく。それを見ている子どもにも伝わっていくわけで、感動の連鎖みたいなものが、起こっていくんですね。本人は気が付いていないけど、鎌倉の子ども達は幸せだと思います。

吉田 私たちにとつては、先生との出会いが一番いい出会いでした。その出会いを広げ、地域の子ども達も幸せに育ってくれればと思います。これからもよろしくお願ひいたします。

平成二十年二月二十三日宮島にて

吉田 正裕

1960年生まれ。広島県出身。
 種智院大学仏教学部及び仁和密教学院卒業後、真言宗御室派大本山大聖院勤務。
 1990年高野山真言宗真光院住職（現在も兼務）。
 1998年真言宗御室派大本山大聖院座主に着任。現在に至る。
 「宮島てらこや」の副会長として、森下先生と共に活動に取り組む。

森下 一

1941年生まれ。愛知県出身。
 京都大学医学部卒業。精神科医。
 1986年不登校児のためのフリースクール「京口スコラ」を開設。
 1989年、日本初の不登校児のための認可高校「生野学園高等学校」を開設。
 1998年、吉川英治文化賞を受賞。
 2002年より「てらこや」活動に奔走中。
 著書に、「不登校生が教えてくれたもの」（グラフ社）等がある。